

追悼のことば

12月末から4月の半ば。チビちゃんこと、娘・桜子と楽しんだクリスマスにお正月、豆まき、雛祭り。そして桜子、10月6日生まれの半年目にあたる4月6日に、桜の下で写真を撮る。その桜の花が無くなる頃まで、毎年寂しさが募ります。

急に突き上げられて落ちたと思ったら、箆笥とワゴンの狭い隙間に猫と閉じ込められました。その後ドンドンという大きな縦揺れ、地震だとわかりました。近所の人に窓を破ってもらい、外に出て見た景色。それは、何軒もの家が倒れ、潰れていない家は傾き、道は塞がれている。私は血の気が引きました。

父、母、桜子は屋根の下敷きで、隙間から声が聞こえました。父は「チビやられたかもしれない。」と言いました。私は「取り敢えず何とかする。」と言って、近所の人に助けを求めました。お向かいの家の車に綱を付けて屋根を引っ張ると、逆に重さがかかってしまい、方向を代えてもう一度引っ張ると屋根はスルスルと外れました。そして、一番に桜子が出て来ました。「まだ暖かい。」という言葉と共に桜子を病院へ運んでもらったのは7時頃でした。同じ頃に運ばれた隣のご主人の訃報が入ったのが11時頃でした。私は、まだ連絡が無いので桜子は助かったかもと望みをつないでいました。私は、両親に続き近所の方々の救出を手伝ったり、知り合いの被災状況を聞きに行ったりとバタバタ動いていました。しかし、夕方に桜子はダメだったということが判明し、私は氣力を無くしました。

その晩、私たち家族は、近くの棟上げする前の一階コンクリート部分だけが出来た家にテントを張って他の家族と5家族で住みました。避難所に決められていた小学校を始め付近の公共の建物はすべて超満員だったからです。私はそこに2月19日までいました。

一方、桜子の遺体は芦屋の警察学校に安置されていました。傷もほとんどないきれいな顔でした。父は、宝塚、伊丹、京都と桜子のお葬式をする所を知り合いに頼み、結局書類が整っていないにもかかわらず受け付けてくれた京都・松井山手に決まりました。

2月1日土曜日お通夜の日、私は松井山手の知り合いの家で震災から初めて

お風呂に入れていただきました。その時、私は震災朝のパジャマのまま、その上にスキーウェアを着てずっと行動していたことに気が付きました。また、私の髪は洗っても洗っても土埃が出てきました。そのため、長風呂になり風呂場で私が倒れていないか知り合いに心配されました。

桜子は京都で茶毘に付されましたが、桜子の骨を見ると頸椎がやられて即死の様子でした。また、内臓付近の骨が血に染まっていたようで、じわじわとお腹の辺りを圧迫されたことが分かりました。ですが、もし息があつたらさぞ桜子は苦しんだろうと、私は悲しい内にも少し安堵がありました。

震災後程なく、桜子が夢の中に出て来ました。その時、桜子が生きていても1日の1/3程は幼稚園、家でも私が仕事や用事にかまけてどれだけ一緒に過ごせているだろうかと、ふと考えました。それなら、8時間ほどの寝ている時間に桜子と共に生活出来る。この考えは私の気持ちを安らかにしてくれました。そして、この考えに応えてくれたのか、桜子もしばしば夢に出て来てくれました。それは私にとって非常に幸せな時間でした。

それがある日、桜子は「ちょっと出かけて来ます。」と言い、夢に出て来なくなりました。それは、2ヶ月ほど続きました。後日、何人もの幼稚園のママ友から「丁度その間、桜子ちゃんが夢に出て来たよ。」という話を聞きました。

また、父が亡くなってから、桜子はほとんど夢に出てくれません。おそらく「じいちゃん、じいちゃん！」って、父と天国で楽しく過ごしていることでしょう。

長い間、私の中での桜子は6歳の姿のままでした。中学生になり背の高くなった桜子の友達を見て、お正月の柳箸を大人用に代えましたが、やっぱり6歳の姿のまま。12歳離れた弟が中学生になり私より背が高くなっても、やはり私の中での桜子は6歳の姿でしかありませんでした。

それが震災20年目のある日、26歳になった桜子の友達がお子さんを連れて来られ、桜子の一番の友達も結婚しました。その時、急に私の中で桜子は26歳のお姉さんになりました。

今生きていたら桜子は32歳。先日結婚された松坂桃李さん戸田恵梨香さんと同じ年齢です。また、私が桜子を出産したのは33歳でした。桜子も今生きていたらこのような感じで生活しているのかなと思います。

桜子、そうチビちゃんはとても優しい子だったよね。震災後、幼稚園の先生から「転校して来た子に最初に声をかけてあげるのはいつも桜子ちゃんだった。」と聞きました。また、近所の人から「街の太陽だった。ちょっと人の顔が見えたら挨拶して、可愛らしくてね。」と言われました。桜子はいつもにこにこして、私が悲しそうにするのは嫌というよりとても心配してくれたよね。だから私も泣かずに、出来るだけ桜子のような笑顔を心がけています。そして、迷った時は桜子だったらどうするかなと考えて決めています。

私は、震災直後から何かしないと時が止まる気がして、ひたすらバタバタと過ごして来ました。桜子の弟ができ、じいちゃんは亡くなり、ばあちゃんは入院、ただ突っ走って来ました。今このコロナ禍、天の配剤だと思って、少し立ち止まってゆっくりするつもりです。だから桜子もじいちゃんと夢に出て来て下さい。32才になった姿を見たいです。そして今世界中が大変な時、何卒皆で私達を見守って下さい。

あらためて、震災で亡くなられた方々、皆様のご冥福をお祈り申し上げます。

令和3年1月17日

加賀 翠